

キロンボとアフロブラジル文学

カルロス・ジ・アスンサオンとオリヴェイラ・シウヴェイラの詩を通して

武田千香

はじめに

「キロンボ」をオンラインポルトガル語辞書で調べると、ブラジルの用法として「奴隷が避難した森の潜伏場所」という語義が出てくる¹。だが近年のブラジルでそれはもっと広い意味で使われる。1988年に公布された現行憲法により一定の条件のもとで元キロンボ共同体に土地所有権を賦与することが義務付けられてからは、「キロンボの子孫共同体 (comunidades remanescentes de quilombos)」として認定されたものも一般的にキロンボと呼ばれる。またキロンボはアフロブラジル文化活動を推進する場や共同体を示す言葉としても使われる。たとえばリオデジャネイロで毎週月曜日に行なわれる「労働者のサンバ (samba do trabalhador)」の主催団体「ヘナセンサクルービ (Renascença Clube)」の入り口には、“Quilombo Urbano Cultura Afro Carioca” (アフロ・リオ文化の都市キロンボ) と書かれている。サイトでその団体は「黒人文化の抵抗と価値向上、そしてアフロブラジル文化表現の多様性のためのスペース」と紹介されている。ジョナタス・コンセイサオン・ダ・シウヴァ (Jônatas Conceição da Silva) によれば、現代のキロンボは、過去のキロンボを参照値として平等主義社会を目指す共同体と定義できるという [SILVA 2004: 65]。すなわち昔の逃亡奴隷の集落に倣いながら、自由と平等が実現された社会をめざして活動する場ということになる。

過去の逃亡奴隷の集落として最もよく知られるのはキロンボ・ドス・パルマーレス (以下「パルマーレス」) だ²。そのリーダーのズンビとともに、ブラジルの黒人の抵抗、自由、そしてアイデンティティの象徴とされ、ズンビの命日の11月20日は2011年に「黒人意識高揚の日 (Dia da Consciência Negra)」として国の記念日に指定され、2023年12月からは全国的な休日になっている。

さてキロンボ、そしてパルマーレスとズンビはアフロブラジル文学においても重要なモチーフで、多くの作品に登場する。とくに英雄としてのズンビは、ほぼすべてのアフロブラジル詩人が何らかの形で、「黒人の抵抗の象徴的な偉大な人物」として取り上げているという [Augel 2021]。それらはどのように扱われているのだろうか。キロンボ、そしてパルマーレスとズンビは作品の中で単に叙事的にその存在が描かれるのではなく、何か特別な意味を持ち、黒人の切実な思いと願いを担っているはずだ。本論では、キロンボ、そしてパルマーレスとズンビがアフロブラジル文学においてどのような文脈でどのような用いられ、そこに黒人のどのような思いと願いが込められているのかを、カルロス・ジ・アスンサオンの詩群とオリヴェイラ・シウヴェイラの「パルマーレスについての詩 (Poemas sobre



Palmares)」を通して考察する。アスンサオンは、アフロブラジル文学の代表的な抵抗の詩人であり、シウヴェイラは、ズンビの命日を黒人運動の象徴として祝うことを提唱した詩人である。

1. キロンボと奴隷制度の禍根

1.1. キロンボ

ブラジルは1500年にポルトガルの植民地となって以降、ヨーロッパへの第一製品の供給地として国際経済体制に組み込まれ、その生産のために多くの人々がアフリカから奴隷として連れてこられた。奴隷にされた人々³の労働環境は過酷を極め、それは採算が取れる年数が7年という数字が物語っている。すなわちブラジルで彼らは、到着後平均7年働かせば元が取れる、いわば「使い捨て」同然だったということである。16世紀から19世紀までの三百数十年にわたり黒人は、植民地ブラジルの経済を支えるために代わる代わる「輸入」され続けてきた [Moura 2021: 18]。奴隷にされた人々は、反乱、怠惰、自殺、逃亡、自己損傷、中絶、嘘などさまざまな形で抵抗した。そのうち逃亡を果たした者が森の奥地や山岳地帯に逃げ込んで作った集落がキロンボである。

奴隷制度は、1822年の独立後も1888年まで維持された。奴隷は、ブラジルの全土で全時代にわたり導入されたため、結果的にキロンボも全土で全時代にわたり出現した⁴。規模は数人のものから万単位の住人を抱えるものまでまちまちで、中には逃亡奴隷ばかりでなく、先住民や都市の被抑圧者や犯罪者や脱走兵なども排除せずに受け入れ [Moura 2022: 31]、後述するようにパルマーレスやアンブロージオのように1万人を超えるものもあった。

1.2. 奴隷制度の傷跡

奴隷制度はブラジル社会に計り知れない傷跡を残した。ブラジルでは異人種間の混淆が進んだため、人種間の対立や差別のない人種民主主義が実現されていると信じられた時期が20世紀にあったが、実際には根強い人種偏見や差別が存在する。社会が数百年をかけて奴隷制度を基盤に形成されただけあって、黒人を劣等とする人種主義が個人の意識的な偏見や差別行動にとどまらず、法律、経済、教育、雇用、司法、政治、文化など社会のあらゆる領域において構造的に根づいている。

しかも奴隷制度廃止の在り方が、その負の遺産を維持させる要因となった。当時は黒人の劣等性ばかりでなく、混血に対しても著しい偏見があり、混血が墮落や衰退を生むと科学的に信じられていたため、解放奴隷の社会統合政策がとられず、黒人は白人優位の社会に放り出された。加えて人種の白色化がめざされ、多くのヨーロッパ移民が奴隷の代替労働力として導入された。教育も特別な技術も持たない黒人は当然のことながら移民との競争に勝てず、そのまま農場で奴隷同然の労働を余儀なくされるか、たとえ新天地を求めて都市に出ても定職に就けず、社会的周縁化の道をたどるしかなかった。良質な教育を受け

る機会も少ないためよい職にも就けず貧窮の状態に置かれるという悪循環が生まれ、現代もそれが続いている。ブラジルでは社会格差が人種格差と密接に結びついているのである⁵。政治でも黒人の参加は進んでおらず、黒人の声は届きにくい⁶。住環境にも恵まれず、黒人は白人に比べて不適切な住宅に住んでいる人が多い⁷。不当な扱いは警察や司法でも受けがちで、逮捕や投獄のリスクも高く、公正な裁判を受ける権利を侵害される傾向がある⁸。

黒人に対する負のイメージを覆すことは容易ではない。黒人イコール奴隷、肉体労働は奴隷、家事は黒人女性奴隷のすること、黒人女性は性的対象という見方が当然だった名残りで、今も肉体労働や家事労働がそれぞれ黒人男性と黒人女性に結びつけられる傾向がある。実際にメイドに黒人女性が占める割合は多く⁹、そのため黒人女性がどこかの家を訪問した際に使用人扱いされることも少なくない。また黒人と白人の混血女性（「ムラータ」）は官能的なイメージが拭われず、身体を許可なく触れられ、不快な発言を浴びせられることもあるという¹⁰。

こうした偏見や差別は文化や歴史にも及ぶ。アフロブラジル文化はとかくフォークロアの視点で描かれ、歴史も白人の視点で作られたものが基礎にあるため、黒人の貢献は過小評価されがちだ。このようにブラジル社会には構造的な人種主義が根づいている。

アフロブラジル文学は、このような人種偏見や差別を糾弾し、境遇の改善を訴えることを重要なテーマとする。アスンサオンはその代表で、黒人の日常の経験を詩の題材として取り上げ、彼らの苦悩を代弁し、社会の不正義を告発する。アスンサオンの文学は近年ますます評価が高まり、2022年にはリオデジャネイロ連邦大学より名誉博士号を授与された [Conexão UFRJ]。このことは1950年代より書きためてきた彼の詩が現在も、構造的な人種主義に苦しむ人々から求められ、共感を得ている証であろう。

さて自由と平等の実現に向け、アスンサオンはともに戦うよう呼びかけるのだが、そのときに持ち出すのがキロンボとズンビである。アスンサオンがどのような黒人の苦悩と思いを汲み取り、それがどのような形でキロンボやズンビに表われているのか、まずはその詩群を通して考えていこう。

2. カルロス・ジ・アスンサオンの詩におけるキロンボとパルマーレス

2.1. カルロス・ジ・アスンサオン¹¹

カルロス・ジ・アスンサオン (Carlos de Assumpção, 1927～) は、サンパウロ州チエテで、本人によれば極貧の家庭に生まれた。祖父は奴隷の身分で生まれ、新生児自由法 (1871) により自由を獲得した。非識字者だったが、カルロスは子どもの頃から祖父の物語を聞いて育ち、奴隷制時代の話は学校で習う歴史とは食い違うものだったという。父も字が読めなかったが、やはり物語を語ることには長けていた。母親は料理と掃除を請け負い、文字が読め、詩を愛好し、図書館でよく本を借りてきた。家族の社会意識は高く、ブラジル黒人前線などの1930年代の黒人運動に携った。

アスンサオンはサンパウロでトラックの運転手や新聞社の掃除夫など非正規の仕事をし

た後、師範学校に通い、サンパウロ州の地方部で教員を務めた。1969年から同州フランカに居住し、そこでサンパウロ州立大学で文学（フランス語－ポルトガル語）と法学を修めた。積極的に黒人運動を推し進め、人種差別と社会の不正義を告発し、黒人の文化とアイデンティティを称揚した。その詩はしばしば抗議活動や文化イベントで、意識の啓発と士気の鼓舞のため朗読され、とくに代表作の「抗議 (Protesto)」(1956)は抵抗の象徴にもなった。だがアフリカの口承伝統の流れを汲み、「現代のスラムやラップの先駆け」[BENÍCIO 2021]とも言われただけあって、その詩が本として出版されたのは1982年だった。1956年ごろが具象詩（コンクレチズモ）の全盛期だったことを考えると、文学史に隠れて、オータナティブな作品が根づいていたことが実感される。

アスンサオンは『抗議』のほか4冊の詩集（『キロンボ (Quilombo)』(2000)、『夜の太鼓 (Tambores da noite)』(2009)、『抗議とほかの詩 (Protesto e outros poemas)』(2015)、『詩選集 (Poemas escolhidos)』(2017))を上梓し、2020年には全詩をまとめた『私は叫ぶのを止めない (Não pararei de gritar)』が刊行された。本論ではその全詩集を扱った。

2.2. 人種差別と社会批判

アスンサオンは、黒人が日々向き合う厳しい現実を、だれにもわかる平易な言葉で、具体的な事例を挙げて詩作する。たとえば先述した警察の不当な扱いもアスンサオンにとっては格好の詩の題材だ。「犯罪 (Crime)」では、突然車から降りてきた大勢の警官に囲まれたが、身分証明書も求められず、何も質問されず、「ただ私の色だけ」が理由だった例が描かれている。そして「ルーティーン (Rotina)」では、夜間一人で歩いている黒人に「兄弟よ、危ない、気をつけろ」と呟いた矢先に「4人の警官が現われた」例が綴られている。警察が去った後には「血だまり」があった。それが日常茶飯事なのであろう、「ルーティーン」というに題名には胸が痛む。黒人が多く居住する貧民街は、麻薬闘争が頻繁に繰り広げられ危険と隣り合わせだ。そんな治安の悪さは「流れ弾 (Bala perdida)」と「殺されている (Estão matando)」で取り上げられている。「ファヴェーラや郊外では／私たちの若者が殺され」（「殺されている」）、「私のような黒人は」「簡単に命を失い」、たとえ交通事故から逃れたとしても「流れ弾に倒れる」（「流れ弾」）という有様だ。

人種差別を取り上げたものではたとえば「運の問題 (Questão de sorte)」と「アナおばさんの場合 (O caso de tia Ana)」がある。前者では「募集枠が3つ」の就職面接試験を黒人と白人と一緒に受けたら、「頭がよく」「教養もある」黒人が落とされ、「そうでない」「白人が採用された」ケースが描かれている。ブラジルの人種差別は外見が左右するためたまたま生まれついた皮膚の色で扱いが変わる。「運の問題」という題名は何とも悲しい。「アナおばさんの場合」では、呼び鈴が鳴ったので玄関に出たら「だれか家の人を呼んでくれ」と言われ、「私が家の者です」と答えたという不愉快な事例が語られている。

黒人の風貌を持つ限り差別を免れない無念さが滲むも詩ある。「髪 (Cabelo)」では、「短くても長くても／直毛でも縮れ毛でも／いずれにしても／殴られる」と、何をしても差別を受ける八方塞がりの状況を嘆き、「ジレンマ (Dilema)」では「黒人男性は心に安らぎを持

つことはできない」、「不正に対して声を上げ、抗議すれば／不適應者だと見なされるし／黙っていても、弱く従順な者とみなされる」と理不尽な扱いに不満を述べる。

そんな仕打ちを許す宗教にも批判は向けられる。本来カトリックの伝統を持つブラジルで差別はあってはならない。「キリスト教のテーマ (Tema cristão)」では「愛こそがパン」であり「命の中の命」なのに、なぜ「互いに愛し合っていない」「私たちが本当にキリスト教徒だと」「世界に向かって言う勇気があるのか？」とキリスト教の矛盾を指摘する。そしてそれを都合よく使う白人に対しては、「宗教は自分たちだけのもの」で「彼らだけが天に行けると思っている」(「あの狂信者ら (Esses fanáticos)」) と非難している。

このようにアスンサオンの詩は、黒人が日頃から遭遇する具体的な経験を詩にすることで、多くの共感と支持を得る。

2.3. 黒人の心得と自文化への誇り

アスンサオンは、そうした不正義と戦う前に、まずは黒人自身がどうあるべきか、その心得を説く。それがよく表われるのが「我々はなんていう黒人なんだ (Que negros somos nós)」である。

歴史の記憶の中の血と汗と涙で刻まれた戦いを知らないなんて、
我々はなんていう黒人なんだ

(…)

我々のルーツを見つけるために何もしないなんて

日ごろ我々の文化を大切にせず、ときには (もっともよく起きることだが)
完全に無視するなんて

不信心で我々の宗教を恥じ、しょっちゅう呪術とかフォークロア (民間伝承) とか
神話などと呼ぶなんて、我々はなんていう黒人なんだ

自分たちを理解しようともせず黒人であることを恥じるなんて、
我々はなんていう黒人なんだ

我々の膚の黒さや厚い唇や平らな鼻や硬い髪を恥じるなんて
我々はなんという黒人なんだ

特に黒人運動に参加し、偏見と戦うと言いながら、ときには胸の中に
何千という偏見を抱いているなんて、我々はなんていう黒人なんだ

黒人にとって大切なことは、自分たちのルーツと文化を知って誇りを持つこと、そして

差別する側の価値観を内面化せず自身を恥じないことだという。アスンサオンは「無邪気 (Inocência)」という詩で、同級生の女の子から「黒人呼ばわりされ」、怒りに紛れて「いつか彼女も (神の罰を受けて) 黒人と結婚する」と言い返した女兒を描いている。戦う前にまずは自分たちのルーツや文化、そして容姿に誇りを持つよう促す。

そのために詩で肉体的特徴の価値転換を図る。「私は黒人 (Eu sou negro)」では自分の膚の色を「美しく力強い／健康で、色褪せることがない」と称え、黒人女性の美しさも次のように詠って、黒人の膚の色や唇の形状に肯定的な評価を与える。

私は君の美しさを歌う
君の膚の夜
君の斜めの目の星の光
君の厚い唇のチョコレート (...)

私は君の美しさを歌う
君の夜の優雅さ
君の声の音楽
君の足取りのダンス
君の歩きのリズムを (「黒人女性 (Mulher negra)」)

そして次のように先祖のアフリカの文化こそが立ち返る場所であることを示す。

私は家に帰ってきた
我が家に帰ってきた
ここの暮らしには意味がある
こここそ私の家なのだ

オシュンが広場を通る
シャンゴがバールで喋っている
今日私は家に帰ってきて
オリシャと一緒に暮らす (「ルーツ (Raízes)」)

オシュンやシャンゴはヨルバの神格 (オリシャ) で、それぞれ川と正義の神だ。アフリカの神々が住むところが「家」という言葉で表現されている。

2.4. 建国者としての黒人と歴史批判

過去を知ることは自尊心の獲得につながる。なぜならブラジルを実質的に作ったのは黒人の先祖だからだ。このことは「私の先祖 (Meus avós)」によく表われている。

私は先祖を誇りに思う
かつて彼らは
奴隷制度という十字架を
背負っていた

私は先祖を誇りに思う
かつて彼らは
自分たちだけで働いた
この国が
今日のように大きくなるように
そのおかげで大きくなった

一般に語られるブラジルの歴史は白人の視点で作られたため、黒人の先祖が「奴隷制という十字架」を背負い、抑圧と暴力を被りながらも屈することなく働き、この国を作り上げたことがほとんど語られない。奴隷にされた人々は存在を抹消され沈黙を強要されて、その貢献はほぼ無視されがちだ。だが実際に農場で畑を耕し、ヨーロッパ向けの作物を作ったのも、石を積んで建物や道を作ったのも奴隷にされた人々で、彼らがいなかったら今のブラジルはない。まさに「この国は／過去の土壤に／先祖が植えた／犠牲の種の成果」であり、黒人はそれを誇るべきなのだ。そうした白人偏重の歴史は受け入れないと、この詩は毅然と言い放つ。

たくさんの物語がある
歴史があえて
語ろうとしない
私の先祖の物語
(...)
私は嘘を受け入れない
私の詩の剣で
すべての悪意ある
嘘の頭を斬り落とす
私を辱めようとし
私の誇りを壊そうとし
私の祖父母の歴史をも
偽ろうとする嘘を

奴隷にされた人々の視点が全く入っていない歴史は「嘘」であり、それを「詩の剣」で切り落とすと言う。詩がここで武器となっていることに注意しておきたい。

またアスンサオンは、一般の歴史の不備だけでなく、誤りも指摘する。一般の歴史では、

1888年5月13日にイザベル皇女が「黄金法」に署名した時を以て奴隷制度は廃止されたとするが、その後も元奴隷は奴隷同然の状態に取り置かれた。つまり奴隷制度廃止は未完であり、与えられた自由も偽りであったと主張する。「5月13日 (13 de maio)」という奴隷制度廃止の日が題名にされた詩では、「日出から日没まで／言ってみればほとんど一人で／この国を建てた」のに、「白人はいつだって／私の丸い背中に乗り」、「私がもう必要でないと／思ったら／脛に／一蹴り入れた」と社会統合の無策を批判する。「イザベル皇女 (A princesa Isabel)」では、「イザベル皇女は／不渡り小切手を振り出し／みんなを騙した／奴隷制は終わっていない」と奴隷制度廃止の欺瞞性を訴える。「歴史 (História)」という詩でも「黄金は偽物だった」とされている。そして「補償 (Indenização)」では、国は黒人に大きな借りがあると主張する。

いったいいつ正義を行なうのか
いつ支払いを開始するのか
忘れられた歴史の借金
国家が黒人に対して負っている
350年以上にわたる
非人間的な労働の借り

2.6. 言葉の戦場としてのキロンボ

アスンサオンは、こうした理不尽な状況に立ち向かって徹底的に戦おうと人々を動員する。そのとき集会で何度も朗読されたのが代表作の「抗議」だ。117行から成る比較的長い詩で、奴隷として売買され農場で苛烈な労働や拷問に苦しんだあげく捨てられた先祖の過酷な運命と苦難、そしてまるで「トロイの木馬の」のように歴史に騙されて「自由」が幻想に終わったために、現代もなお続く社会の不正義や抑圧が語られる。「叫ぶことは呼吸をするよりも必要だ」、「たとえ私の火の言葉に／背を向けられても／私は叫ぶのをやめない」と、断固としてこれに抗議し、戦う決意が強い口調で示される。全詩集のタイトルはこの詩からとったものだ。

さてその戦いに向けて呼び起こされるのがキロンボ、そしてパルマーレスとズンビである。まずはキロンボについて、それがどのようなものとして提示されているかを「私の戦い (Minha luta)」を通して見ていこう。詩人は「私の戦い」は「先祖の戦いに根差している」と言って、自分は先祖の苦悩を引き受けて戦うと宣言する。過去のキロンボが「先住民も搾取された貧しい白人も一緒に」戦ったように、この戦いも「私たち全員の戦い」であり、「私のキロンボ」も「過去のキロンボと何も変わらず」「不正義」と「差別」と戦うと言って、次のように呼びかける。

本当に自由を愛する者たちよ
本当に兄弟である者たちよ

本当に愛を胸に抱く者たちよ
手を貸してくれ
私の声に唱和してくれ
なぜなら友人よ、私の今日のキロンボは
過去のキロンボと同じく
すべての被抑圧者のキロンボ
すべての被搾取者のキロンボ
すべてが歓迎されるキロンボ
我々すべてのキロンボだからだ

キロンボは「過去のキロンボ」に倣ってすべての弱き者に開かれている。かつてのキロンボが人種に関係なく社会的弱者を受け入れたことは先述したとおりだ。では武器には何を使うのか。「私のキロンボ (Meu quilombo)」には「私はただの一介の人間／その言葉のキロンボで戦う」という詩句がある。「私の先祖」でも「詩の剣で」「斬り落とす」と言っていたが、自由と平等を勝ち取る手段は、アスンサオンの場合は言葉なのだ。言葉で戦う場こそが文学のキロンボなのだろう。

2.7. ズンビのメシアとしての神格化

では、そこにパルマーレスとズンビはどのように関わるのだろうか。

興味深いのは、「世界中の兄弟 (Irmão de todo mundo)」で「私はカルロス・ジ・アスンサオン／世界中の兄弟 (...) パルマーレスのキロンボから来た／私はズンビの末裔」とアスンサオンが本名を名乗ったうえで、自らをズンビの末裔だと位置づけていることだ。マイノリティを代表するアスンサオンの詩の「私」はすべての詩において黒人の共同体全体を代弁していると考えられるが[ドゥールーズ／ガタリ 2019: 30]、戦いを呼びかける詩ではその姿勢がさらに明確になる。アスンサオンの場合、背負うのは現代の黒人の声だけでない。「先祖の馬 (Cavalo dos ancestrais)」で「先祖は私を道具にした／私の声は私ではなく先祖の声だ」¹²と述べているように、奴隷制度の下で言い尽くせぬ苦難に遭った先祖すべての声も代弁する。ではどうやって代弁するのか。それが「私 (Eu)」に表われている。

先祖の大地で
私は戦士だった
(...)
ある日突然
先祖の家から
乱暴に引き剥がされ
奴隷にされ
今日、私はアメリカで

自由のために堂々と戦っている
ここにいるのはアラゴアスのパルマーレスのズンビ

つまり「私」は先祖であるズンビを宿することができるのだ。「バトゥッキ (Batuque(dança afro-tietense))」では太鼓を激しく鳴らしながら「すべての色の兄弟たち」をキロンボに集める場面が詠われているから、ズンビはそんな太鼓の音に合わせて祖霊として憑依するのかもしれない。

さらにズンビは、「系統 (Linhagem)」で「わが父わが導き手」として「オルン」からのメッセージを届けてくれる存在とされている。「オルン」とはヨルバ語で「天、霊界」という意味だ。

ズンビはわが父わが導き手
オルンからのメッセージを届けてくれる
私の歯は夜闇に光る
オグンの剣 (アガダ) に研ぎ澄まされて

ここではもうズンビは地上の戦士ではなく霊界が遣わした特使になっている。では、そのズンビに何が期待されているのだろうか。それがよく表われている詩を三つ紹介しよう。

まず「ズンビが帰ってきたら (Quando Zumbi voltar)」には、ズンビが帰ってきたら「我々の暮らしが変わる／パンと正義が現われる」と書かれている。そして「ズンビの帰還 (A volta de Zumbi)」は、「スーツを決め込む／傲慢な暴漢／自分たちだけが主だと思い込んでいる奴ら」や「すべての／黒人と先住民と貧しい白人を／蔑み差別する奴ら」を追放してくれるとある。さらに「ベリンバウ (Berimbau)」¹³では次のような期待が述べられる。

ズンビは必ず戻ってくる
ズンビがやってきたら
家に秩序をもたらし
全てをあるべき場所に戻してくれる
飢えた人にパンを与え
必要としている人を助け
この国で蔑ろにされた人々と
貧困をやっつけ
人々を幸せにし
自由の火を灯してくれる
祖国の胸の中に
ここではかつて見たことがないようなほどに
(...)
ズンビは我々の希望
皆の希望

ズンビは黒人を抑圧者から解放し、自由で幸せな暮らしをもたらす存在になっている。これはもう救世主である。ポルトガル語文化圏には「セバスチャニズモ」という特有のメシアニズムが見られるが、ズンビはメシアのように神格化されている。

「ズンビ神話」研究で知られるアンダソンは、アフロブラジル文学で繰り返し扱われるズンビに与えられる「モチーフ」には5つあると述べ、神格化は②に挙げられている。[ANDERSON 1996: 108-112]。

- ①先祖としてのズンビ
- ②ズンビの神格化
- ③5月13日の虚偽性と永続的な真の自由を実現できる空間としてのキロンボ
- ④白人中心主義に対抗する再獲得、再命名、再領土化¹⁴
- ⑤我々×彼らの二項対立化
(ズンビの末裔×非末裔、奴隷×自由人、キロンボラ×その帰属意識のない人)

これを見ると、アスンサオンのズンビは②の神格化以外にも該当しそうだ。「私」が「ズンビの末裔」とされているのは①、アスンサオンがズンビとして自由への戦いに向けてキロンボに召集するのは③、ズンビの救済によって新しい暮らしを獲得しようと促すのは④、ズンビの許に集う社会的弱者と、権力者である白人と対比させる構図は⑤である。アスンサオンの詩におけるキロンボは、ズンビの勇氣と行動力を宿した「私」が、先祖をはじめすべての社会的弱者の苦悩とズンビの救済への希望を代弁し、言葉で戦う場である。

2.8. アスンサオンの詩の変化

ところでアスンサオンの5冊の本のうち2冊目以降は、前までに刊行された本に掲載された詩を蓄積させていく形で編纂されている。したがって5冊は一つの総体としてまとまりを持っている¹⁵。だがそれをふまえても最初の『抗議』と2冊目以降の間にはある変化がみられる。それはキロンボやズンビの存在感が2冊目の『キロンボ』以降で増していることだ(題名そのものも「キロンボ」である)。『抗議』にもキロンボが「私のキロンボ」に、キロンボとズンビとパルマーレスが「私の先祖」に出てくるが、「私のキロンボ」では「私は言葉のキロンボで戦う」と1行でさらりと言及されているだけだし、「私の先祖」でもそれらは歴史上の出来事の一つとして挙げられている形で、いずれも2冊目以降で見られるような特別な扱いはされていない。また『抗議』には、2冊以降には見られない詩人の失望が窺われる詩が4編もある¹⁶。この変化はどのように解釈すればよいのか。『抗議』と『キロンボ』が刊行された年はそれぞれ1982年と2000年で、その間に黒人運動が本格的な高まりを見せたことを考えると、その変化はそのことと関係があるのではないか。

実はズンビの命日を黒人運動の象徴とすることを提案した詩人オリヴェイラ・シウヴェイラが「パルマーレスについての詩」の執筆期間としている時期はそれと一部重なる。その詩を通して、その時期とキロンボ、そしてパルマーレスとズンビの関係性を考えていこ

う。

3. オリヴェイラ・シウヴェイラ「パルマーレスについての詩」

3.1. オリヴェイラ・シウヴェイラ

オリヴェイラ・シウヴェイラ (Oliveira Silveira, 1941-2009) は、ブラジルでも黒人の人口が少ない部類のリオグランデドスル州で白人の父と黒人の母のあいだに生まれた。フランスのネグリチュードに惹かれてリオグランデドスル連邦大学でフランス文学を修め、卒業後は中等教育機関で教鞭を取りながらジャーナリストとして活動する傍ら黒人運動にも携わった。1971年のポルトアレグレのパルマーレス・グループの創設には発起人の一人として関わり、ズンビの命日である11月20日を記念日とすることを提案した。きっかけは義父からもらったパルマーレスに関する本だった。当時は5月13日が奴隷制度廃止の記念日として祝われており、それが黒人の歴史を奴隷制度へ完全な服従のイメージに矮小化することに反発を感じていた。そして学校でも黄金法に署名したイザベル皇女が「奴隷の救済者」として称えられていることも苦痛となっていた。ズンビはそれに替わるものとして、世代をつなぐ力があり、20世紀の人種主義と戦う人々にも十分通じると思ったという¹⁷。

シウヴェイラはその後も黒人の歴史について知見を深め、代表作「パルマーレスについての詩」(1972-87)を含め10冊の詩集を個人で出版し、大統領府の人種平等促進政策特別事務局[SEPP/PR]のアドバイザーを務めるなど、文壇やジャーナリズムに留まらず、黒人の地位向上と権利獲得のために幅広い領域で活動した。2009年に68歳で死去したが、2021年にその文学および社会における功績が認められ、リオグランデドスル連邦大学より名誉博士号を授与された。[UFRGS]

3.2. 「パルマーレスについての詩」

「パルマーレスについての詩」はパルマーレスの抵抗とその歴史的な意義を綴った639行から成る詩である。10部に分かれ¹⁸、第1部から第8部までは、奴隷にされた者が農場を逃亡した後パルマーレスのキロンボで平和で豊かな暮らしをしているところへ、政府の討伐隊が襲来し、キロンボが破壊されるまでが描かれている。残りの第9部ではパルマーレスの自由について、第10部ではパルマーレスのレガシーが語られている。まずは第8部までの概要を見ておこう。

詩は、奴隷にされた者が闇夜に手錠や鉄輪をつけたまま森へ逃亡し、パルマーレスに無事到着したところから始まる(第1部)。パルマーレスでは深奥な森と山が広がり、空は豊かな「オーラ」に包まれている。「万年筆の槍」で「自由」という文字が描きだされ、名誉と誇りを勝ち取った喜びの叫びが湧きあがる(第2部)。山麓には槍で、歴史の外塁には血でズンビという名が刻まれる。ズンビの記憶は永遠だ。たとえヤシの木が根こそぎ

にされても、歴史に焼かれても残るだろう（第3部）。

詩人は公的歴史家に呼びかける。大邸宅に代表される人々を見るのではなく、焼けつく「太陽の真下で」強制労働に従事し、「鞭打ちの後」「傷に塩を塗り込まれる」残酷な仕打ちに遭った「私たち黒人奴隷」を見るようにと（第4部）。彼らはもともとアフリカで「墓場船」たる奴隷船に乗せられ、売られて働かされ、鞭と焼鑊と拷問具の餌食となった。農場での非人間的な労働に耐えられず、鳴り響くタンボールの音に引かれてキロンボにやってきた（第5部）。晴れてパルマーレスにたどりつき、「囚われの身から自由に／自分の身の主に」なり、もう「鞭に呻くことない」（第6部）。

キロンボではアフリカの神々や祖霊が祀られ、美しい自然が広がっている。熱帯の多様な果実がなり、森は動物や鳥で賑わい、川には魚が泳いでいる。食糧は豊富で、黒人は自由で平和な日常を送っている（第7部）。だがそれは危険と隣り合わせだ。子どもたちを守るため、そして自由を守るために周囲には要塞が建てられた。政府軍の猛攻を次々と受け、初代リーダーのガンガ・ズンバのもとで迎え撃ったが、戦いはズンビに引き継がれた。ズンビは全身全霊で自由のために戦ったが、パルマーレスは家屋もサトウキビ畑も焼き尽くされ、徹底的に破壊された。ついに11月20日、敵の手はズンビに及び、ズンビは殺された。自由のため「命ある限り」戦ったズンビの勇姿は後世の模範として次のように詠い上げられている。（第8部）。

ズンビの戦士としての勇猛さ、
最後の息が尽きるまで抵抗し、
命の最期の灯火が消えるまで戦った
命ある限り、最後まで
模範として。

「パルマーレスについての詩」はこのようにパルマーレスの偉業を語る叙事詩であるが、単に過去の偉業を賛美しているのではない。パルマーレスとズンビを通して黒人運動が目指すべき方向を示している。

3.3. 理想としてのパルマーレス

そのめざすべきパルマーレスとはどのような社会だったのだろうか。

第4部に詩人が「公的な歴史家」に対し、「邸宅や屋敷」ではなく「屑を見」るように促す場面がある。支配階級の方を見るのではなく、奴隷船で連れてこられ、惨烈を極める環境での労働を強いられ、「お嬢さんの籠を担いで」「慈善的で利他的」に働き、ときには「鞭から柱を守るために」「鞭打ち柱に抱きつき」「傷口に塩を塗り込まれ」、「屑」扱いされる仕打ちにも耐えた彼らこそを見るべきだと言う。それは奴隷として働かされた人々こそがブラジルの真の建国者だからだ。彼らのことを「屑」と言ったのは、その貢献が軽視され打ち捨てられてきたことへの皮肉であろう。

そして第9部でも歴史の見直しを迫る。次に引用するのは第9部の冒頭と終わりである。

ブラジルが自由になる前の世紀に
パルマーレスは自由を経験した。
国が自らを自由と考える
前の世紀に
パルマーレスは国となり、自由な体制だった。
(...)
丸々1世紀続いたパルマーレス。
ブラジルで最初の自由解放!

「国が自由になる」とはブラジル独立のことで、パルマーレスは、ブラジルが国家として独立し自由を獲得する前に「自由」の概念を先取りし、自由を先駆けて体現していたと言いたいのだ。つまりパルマーレスは反乱者の集団どころかブラジルで初めて自由を実現した社会だということになる。

シウヴェイラが黒人の歴史について探究した1970年代～80年代にはパルマーレス研究においても大きな進展があった。パルマーレスに関する記録は、討伐隊の日誌や王室との書簡や隊員の回想といった白人の視点から書かれた記録が残っているだけで、研究も歴史や文化の記述に留まり、1960年代まではほとんど体系的な研究がなされていなかった。1970年代に初めてデッシオ・フレイタスがポルトガルやブラジルの公文書に基づき、パルマーレスの抵抗運動がブラジルの奴隷制度や社会に与えた影響など経済や社会的側面にも焦点を当てた研究を行ない、『パルマーレス: 奴隷の戦争』を1971年に発表した [GOMES 2010: 9-10]。シウヴェイラはパルマーレス・グループによる最初の11月20日の祝賀行事の後で、同年に出版された同書をフレイタス本人からもらっている [GOMES 2010: 151]¹⁹。またキロンボが単なる逃避集落ではなく抵抗の拠点であったことや奴隷にされた人々が社会の変革において歴史の主体として積極的に関わった存在であったと主張するクローヴィス・モウラの研究も重要な視点をもたらした。

フレイタスによれば、16世紀末にサトウキビ農園から逃亡した40人ほどの逃亡奴隷で始まったと推測されるパルマーレスは、17世紀の半ばには20ほどの集落²⁰から成る「黒人国家たるパルマーレス共和国」 [FREITAS 1984: 9] になっていた。そこではかなり広範な権限を持つリーダーの下に評議会と全住民が参加する議会が置かれ、リーダーは評議会で、評議員は議会で選出され、重要な決定は住民の合意を求める民主的な意思決定プロセスが作られていた [FREITAS 1984: 43-4]。また逃亡奴隷以外にも先住民や白人とも混血が進み、民族的にも文化的にも多様な集団が築かれ、彼らは「共通の不幸」という絆で結ばれていたという [FREITAS 1984: 41]。主要産業は農業で、トウモロコシやキャッサバ、サツマイモ、バナナ、サトウキビなど複数の作物を栽培し、自給自足を基本とし、余剰分は役職者やリーダー、子どもや老人や病人などの非生産者のために共同体に納めることが義務づけられ、資本主義社会における剰余価値のようなものは存在しなかった。漁や狩猟も行なわれ、食糧は豊富で飢えとは無縁だったようだ [FREITAS 1984: 36-37]。注目すべき点

は、個人使用の物以外はすべて共同体に属していたことだ [FREITAS 1984: 37]²¹。つまりパルマーレスには、奴隷制度、そして単一栽培を基盤とした大土地所有制とは真つ向から対立する民主的な共同体主義社会が築かれ、自由が享受されていたのだ²²。

これについてモウラは「パルマーレスはその経済的、政治的、社会的なダイナミズムの例によって、奴隷制植民地構造を否定した。その例は、植民地システム全体に対する恒久的な挑戦であり、闘争の動機だった」としている [Moura 2021:70]²³。そしてキロンボは単なる逃亡奴隷の集落ではなく、奴隷制度に対する黒人の抵抗の拠点だったとして、「キロンボは (...) シストや閉鎖的な集団のようなものではなく、それどころか、労働の基本形態が奴隷制であった社会のさまざまなレベルの不満や抑圧を結集した抵抗の中心であった」と述べている [Moura 2022: 41]。現にキロンボの住人は、近隣の農場や都市で奴隷として働く人々や解放奴隷たちと密に連絡をとり、共謀して農場を襲撃したり暴動を起こしたりし、反乱にも加担した。つまり奴隷にされた人々も社会の変革にも歴史にも主体的に参加していたわけだ。モウラは「奴隷は当時の法律に従ったままの単なるモノでも (...) 歴史をただ観察するだけの受動的な対象でもなかった (...) 様々な形態を通して、その崩壊の過程で様々なレベルで作用し、システムを消耗させる永続的な動的構成要素だった。」 [Moura 2022: 20] としている。

文化においては、パルマーレスではアフリカの言語を基本にポルトガル語とトゥピ語が混合した言語が話され、白人とは通訳を介して話したという [FREITAS 1984: 42]。宗教は、アフリカ由来のアフリカの信仰とカトリックが習合したものが信じられていた [FREITAS 1984: 42]。パルマーレスでは、アフリカの言語や宗教の伝統が守られていたのだ。

さらに 1980 年にはパルマーレスを理想として位置づける重要なことが起こっている。黒人運動家のアビジアス・ド・ナシメントが「キロンビズモ」を提唱したのだ。キロンビズモとは、キロンボは単なる逃避場所ではなく、奴隷制度に対抗して自由と平等と連帯、そしてアフリカの伝統の維持に基づく理想的な共同体主義社会を実現していたと考え、それを現代社会で再現することをめざす思想である。ナシメントは、アフリカ伝統の共同主義を「ウジャマアイズモ (ujamaísmo)」という言葉で表現し²⁴、パルマーレスを模範とするよう次のように提起した。

アフロブラジル人の自己決定に基づく権力の制度化のためには、キロンボ・ドス・パルマーレスという啓発的な例がある。これは、アフリカの伝統的な共同体主義の進歩的な構造を採用することを意味するが、その長い経験はそこに搾取する者も搾取される者も存在しないことを示している。アフリカの共同主義を受け入れ、それを現代の概念的、機能的、実践的な要求に沿った形で位置づけることは、歴史を私たち自身に有利に逆転させることにほかならない。 [Nascimento 2002: 42]

このようにナシメントは、アフリカの伝統や価値観や文化を尊重し、共同体主義の原則に基づき、奴隷制と戦ったパルマーレスが、現代の正義や平等や人権を求める社会運動の模範となると訴えた。このように 1970 年代から 80 年にかけてはパルマーレスに関する研究が進み、それを理想とする考え方も生まれた時期だった。なおキロンボについては、それ

そのものがアフリカに起源だという研究もある。カベンゲレ・ムナンガは、ブラジルのキロンボは「アンゴラの超民族的で中央集権的な政治的軍事組織」が起源であり、「間違いなく、アフリカのキロンボを模倣したもので、奴隷制度に対抗するために奴隷たちが再構築したもの」だ述べている [MUNANGA 1996, p. 63]。

3.5. 被抑圧者の英雄ズンビ

では、ズンビはどうだろうか。パルマーレスと同様にズンビに関する記録も白人の視点から書かれたものが僅か存在するだけで、今日ズンビの伝記を書くことは不可能だとすら言われる。「残るは神話だけで、それが歴史家、宗教家、軍人、科学者、教育学者、人類学者、映画監督、考古学者、小説家、そして最近では軍出身の政治家によって何世紀にもわたりゆっくりと丹念に作りこまれていった」。現在流通しているズンビ像は、実は「実際は存在したことがないズンビ」 [GOMES 2019: 423-4] なのだ。そんなズンビには、植民者のズンビ、ブラジル独立時のズンビ、そして被抑圧者のズンビという3つの像があるという²⁵。このうち植民地者のズンビとブラジル独立のズンビは英雄にはなり得ない。なぜなら植民者にとってズンビは奴隷制を脅かす存在であったし、独立した当時ブラジルは西洋を模範としていたため、ズンビは野蛮とされ英雄になり得なかった。つまり英雄としてのズンビは、やはり自由のために戦う被抑圧者によって、文学、映画、演劇、音楽、絵画など様々な芸術文化活動の中で繰り返し取り上げられる中で醸成されていったものなのだ [GOMES 2019: 426-427]。

ラウレンチーノ・ゴメスは、その英雄化のプロセスの「頂点が1980年代に出版された2冊の本だった」 [GOMES 2019: 428] と述べている。その2冊とはデッシオ・フレイタスの『パルマーレス：奴隷の戦争―』(1981)²⁶ とジョエウ・フフィーノ・ドス・サントスの『ズンビ』(1985)である。実は前者は先述したフレイタスの著書の第3版で、フレイタスはズンビの生涯を小説化したものを第6章としてそこに加えたのだという [MAESTRI 2023]。ゴメスによれば、これらの本はノンフィクションとして出版されたが、著者たちには「明らかにイデオロギーが絡む目的で歴史研究を歪める意図」があり、「今日では架空だと知られている名前や日付、出来事や背景で歴史の知の空白を過度に埋めていった」 [GOMES 2019: 428]。フレイタスの本に書かれているズンビは1655年に生まれ、赤ん坊のころに政府軍の襲撃を受けた際に連れ去られ、アラゴアスのある神父のもとで育てられ、聡明だったためその後神父と共にポルトガルに渡ってラテン語と神学を学んだことになっている。そして1670年に家を飛び出し、武装將軍ズンビとしてパルマーレスに戻ったという。これらのことは、その後の歴史研究で事実でないことが明らかになっているが、それにも拘わらず「真実として定着」 [GOMES 2019: 429] し、ズンビの英雄像をますます壮大なものにした。これも神話の一つだろう。だが、神話とは「物語としても構造としても文化の産物であり、それらの文化にとってはそのようなものとして真実」 [Anderson 1996: 101] なのだ。その英雄像は今も維持され、たとえばゴメスが指摘するように、パルマーレス文化財団のサイトのズンビの紹介はそれを踏襲している²⁷。ズンビはこうして、1970年代から

1980年代にかけて本格化する黒人運動の中で「英雄的な戦士、自由と弱者と被抑圧者たちの守護者として、植民地時代にポルトガル人に押し付けられたブラジルの社会秩序や奴隷制に挑む」[GOMES 2019: 428] 象徴的存在となっていた。これはアスンサオンの詩に変化が起こった時期とも重なる。

3.6. パルマーレスのレガシーと未来への挑戦

さて「パルマーレスについての詩」に話を戻そう。第10部ではパルマーレスのレガシーが語られている。すなわちパルマーレスが蒔いた自由の種がパルマーレス滅亡後も、ブラジルの各地でどんどん芽を吹いていったことが紹介されている。以下は第10部の冒頭である。

血が流された滋養豊かな土壌
ズンビとその配下の血
ズンビと私たちの血
たちまち地の奥へと吸い込まれ
この地の血脈を養い、
後世の身体を養い、
その先で再び姿を現わした、
さらに多くのキロンボの幹となる核として、
新たな反乱の根として。

当初はわずか数十人で始まったパルマーレスは万単位の人口を抱えるようになり、「ラテンアメリカにおける奴隷制度に対する最大の抗議行動」[Moura 2021: 49]になった。植民地政府にとっては大きな脅威で、ポルトガル軍とオランダ軍は討伐を続け、パルマーレスは60年以上にわたって抵抗を続けたが、ついに1695年11月20日、討伐隊に屈し、パルマーレスは壊滅し、ズンビも殺害された。

パルマーレスは滅亡したが、キロンボや黒人の反乱はその後もあちこちで続発した。パルマーレスは「さらに多くのキロンボの幹となる核」となり、「新たな反乱の根」を生やしたのだ。どのキロンボも抵抗し、まるでもぐらたたきのように、いくら破壊されても別のキロンボが生まれ、ときにはキロンボ・ド・カンポ・グランジ²⁸のように同じところに再生したものもあった。また黒人は、マヌエウ・コンゴの乱²⁹をはじめ多くの反乱を起こしたし、バライアーダの乱³⁰のように他の人が起こした反乱にも参加した。第10連ではそうした戦いや反乱の主なものが列記されている。

パルマーレスは20世紀に入っても「核」となって「根」を生やし続けた。主なキロンボや反乱が挙げられた後には、「黒人戦線」や「黒人新聞、ジョアン・カンジド、ソーラーノ、アビジアス」³¹など20世紀前半の黒人運動の主要なメディアや重要人物が挙げられ、次のように続けられる。

多くの名で存在するキロンボ、
多くの無名のキロンボ、
死産となった廃止
100年を経ても、
至るところで生き続けるキロンボ、
私の黒人兄弟たちの黒い芸術で
各々のグループの炎の中で、
黒人の
運動を生み出すエネルギー
この詩もまたキロンボとなる
目の奥の
声の、魂の、胃のキロンボ
あの周縁の黒人
そこへ向かう
(...)

闘いは続いている、だからこそ
この詩は一つのキロンボなのだ。
だからこそ、パルマーレスの (下線は筆者)
戦士である兄弟よ、
無名であろうと輝かしい名であろうと、
この詩はあなたのためのものだ、
この詩は根を繋いでいくためのものだ。

「死産となった廃止」は、アスンサオンのイザベル皇女の「不渡り小切手」と同様、未完の奴隷制度廃止を指し、「廃止100年を経ても」とは、奴隷制廃止100周年の前年、すなわちこの詩が書かれた1987年のことだ。つまりこの時点でキロンボは芸術分野に及んでいる（「私の黒人兄弟たちの黒い芸術」）。そして「この詩もまたキロンボ」と言っているのは、詩もやはり言葉で自由と平等を勝ち取る戦いの場であるからだ（第1部で「自由」という文字が「万年筆の槍」で書かれたことを思い起こそう）。

さらにキロンボが「目の奥の／声の、魂の、胃の」とされている点にも注目しておこう。もちろんこれを、真実や現実を見る目や、抑圧に対してあげる声、魂で訴える抵抗、生存をかけた生命の戦いと抽象的な意味に解釈することもできるが、ブラジルにおける黒人が芸術、音楽、宗教、料理など多岐にわたる文化的表現を通して抵抗を続けてきたことを考えれば、キロンボは、言葉で戦う文学作品のみならず、目で戦う造形芸術、声で戦う音楽、魂で戦う宗教、胃で戦うグルメなどあらゆる領域で抵抗の表現を作り出す場と捉えることもできる。「労働者のサンバ」の実施会場が「キロンボ」とされているのも、そこが音楽による「黒人文化の抵抗と価値向上」をめざす抵抗の場だからだ。キロンボは、単に物理的な場所ではない。どんな分野でも黒人が自由と平等を求めて社会の不正義と戦う場

はキロンボであり、したがってアフロブラジル文学でも抵抗の作品を生み出す場はキロンボであり、作品自体も戦いの場という意味でキロンボとなり得るのだろう。

3.7. 1972年～87年

ところで文学作品は一般的に発表された年が刊行年とされるが、シウヴェイラはなぜ1972～87年という複数の年を採用したのだろうか。これは黒人運動の高まりとともにパルマーレスとズンビの象徴性が定着したことと関係があるだろう。

シウヴァは、シウヴェイラが「ブラジルのアフリカ系の人々の歴史にとってパルマーレスのレガシーを考えるのに重要だ」として分類した20世紀後半の黒人運動の3つの時期を紹介している [SILVA 2004: 108-9]。

第Ⅰ期 (1971～1978)：新たな目的と方向性が獲得された歴史の転換期

第Ⅱ期 (1978～1988)：黒人運動の組織化と多分野への拡がり

第Ⅲ期 (1988～)：戦いの結実の開始

それぞれ簡単に説明を加えていこう³²。パルマーレスとズンビに関係する箇所には下線を伏した。

1970年代の第Ⅰ期は、軍事独裁政権に反対する民主化運動の中で、マイノリティによる社会運動が興り、黒人も立ち上がり始めた時期である。シウヴェイラはこの時期に黒人運動を推進するためポルトアレグレにパルマーレス・グループを発起人の一人として結成し、ズンビの命日を自由解放の日として祝うことを提案した [SILVA 2004: 16]。

第Ⅱ期の始まりとされる1978年は、黒人運動にとって大きな節目の年である。黒人統一運動 (Movimento Negro Unificado - MNU) が立ち上がり、運動は全国規模になり、大会でズンビを奴隷制に対する奴隷にされた黒人たちの抵抗とその権利獲得への戦いの象徴とし、命日11月20日を祝うことが提案された。また土地の取得や積極的な機会の獲得を求める政治的な要求も高まった。1978年に黒人による文芸雑誌『黒人ノート (Cadernos Negros)』が創刊され、1980年には文芸グループ「キロンボージ (Quilombhoje)」が結成されている。またナシメントのキロンビズモが提唱されたのもこの時期だ。1971年にフレイタスの『パルマーレス：奴隷の戦争』の初版、81年に第3版が刊行された。

第Ⅲ期は、1988年の現行憲法の発布以降現在に至る時期である。1988年憲法で人種差別が禁止されたほか、民衆文化と先住民文化とともにアフロブラジル文化のブラジル文化形成への寄与が位置づけられた。また元キロンボ共同体への土地の賦与が義務となり、キロンボの認定を実施するパルマーレス財団が設立された。1989年の7.716法で人種差別が犯罪だと明記され、2003年の10.639法により初等及び中等教育でアフロブラジルとアフリカの歴史を教えることが義務化された。2011年の12.519法で、11月20日のズンビの命日が「黒人意識の日」として国の記念日とされた。この記念日は2023年、14.759法により国民的祝日となった。2012年には高等教育機関でのクオータ制の導入が12.711法で

定められた。

以上からわかるよう 1972～1987年は第Ⅰ期と第Ⅱ期に相当する。1988年の現行憲法の発布以降、土地の所有や司法・教育における権利が認められていく前の段階で、シウヴェイラは黒人運動が高まっていったプロセスとそれがめざしたところを、それと並行してその象徴として定着したパルマーレスとズンビに仮託して描いたのであろう。

ただその時期に初めてパルマーレスやキロンボが黒人運動に採用されたわけではないことは最後に触れておきたい。ブラジルでは20世紀初めにいったん黒人運動が高まり、1926年に「黒人を結集させ、現在も続いている離散に終止符を打つための蜂起を起こす」³³ことを目的としてパルマーレス市民センターが創設されている。この組織は後に結成されるブラジル黒人前線の活動にも大きな影響を与えた [SILVA 2004: 25]。また1944年にアビジアス・ド・ナシメントが創始した「黒人実験劇場 (Teatro Experimental do Negro-TEN)」でもキロンボが意識され、機関誌『キロンボ』を発行している。そこは白人中心の芸術文化において黒人の価値を回復するための文化芸術的な実験の場となり、人種デモクラシーの偽善性を暴くこともめざされた [NASCIMENTO 2002: 97]。ナシメントはこの約30年後にキロンビズモを提唱する。

音楽分野でパルマーレスは1960年代から題材にされている。1960年にはリオデジャネイロのエスコーラ・ジ・サンバのサウゲイロが「キロンボ・ドス・パルマーレス」をテーマ曲にしている [SILVA 2004: 69]。このように1930年代から1960年代にもパルマーレスを採用する動きはあった。だが、パルマーレスやズンビが本格的に黒人運動の抵抗の象徴として定着したのは1970年代だったのであろう。

おわりに

かつて逃亡奴隷の集落として生まれたキロンボは抵抗と反乱の拠点でもあった。そして現代においても、奴隷制度と植民地主義に対抗して戦った先祖の苦難と闘争の歴史を記憶しながら、抵抗の精神を受け継ぐと同時に、アフリカのルーツを自覚してその文化的伝統を継承し、現代の不正義に対抗し、自由と平等のために戦う場となっている。キロンボはそのための共同体意識と連帯感をアイデンティティとして醸成する文化的・社会的拠点として機能している。過去のキロンボが、逃亡奴隷に限らず社会から疎外された人々を受け入れていたことも、現在黒人のみならずあらゆる社会的弱者を束ねるうえで有利に働いた。

そしてズンビとパルマーレスの「神話」は、1970年代から80年代にかけての黒人運動の高まりの中で、奴隷制への抵抗という過去の記憶を背負い、現代の自由と平等を求める闘争のために作られた言説となった。文学はそれを多くの作品で題材として取り入れることで、その形成に寄与した。アスンサオンの詩群では、とくに民衆に訴える必要性からズンビを、模範を超えて救済をもたらす英雄へと神話化する発話戦略がとられた。2冊目以降にズンビとパルマーレスの存在感が増した理由はそこにあるのだろう。そして希望の醸成に伴って、アスンサオンの悲観も背後に退いていったのだ。

現代のキロンボは、過去と現在の連続性を保ちながら、社会の変革をめざす彼らの「制

度的・歴史的場」(ホール 2011: 13) として機能し、その際に駆使されているのがズンビと
パルマーレスという言葉である。

後注

- 1 “Escodenrijo no mato onde se refugiavam os escravos.” (Dicionário Priberam da Língua Portuguesa 2008-2024).
また DICIO – Dicionário Online de Português でも “Lugar secreto, encoberto e escondido em meio ao mato,
onde ficavam ou para onde iam as pessoas escravizadas que fugiam das fazendas, minas ou casas de família onde
eram exploradas e sofriam vários tipos de violências. / Localidade fortificada povoada por pessoas escravizadas
que haviam fugido do cativeiro, sendo dividida e organizada internamente; geralmente, também acolhia índios ou
brancos” とある。
- 2 パルマーレスが存在していた当時の 17 世紀は「モカンボ (mocambo)」という名称が使われておりパルマー
レスのこともその名で呼ばれていた。「キロンボ」が「モカンボ」の同義語として使われるようになった
のは 17 世紀末のことだという。[GOMES 2005: 11]。だが今日一般にはパルマーレスには「キロンボ」と
いう言葉が用いられるため、本論でも「キロンボ」を使用する。
- 3 最近では escravo (奴隷) ではなく、escravizado (奴隷にされた人々) という表現を用いる傾向にある。だが、
日本語では「奴隷にされた人々」を一語で表現できない。本論ではなるべく「奴隷にされた人々」とい
う意味を込められる表現を使うように努めたがやむを得ず「奴隷」とした箇所もあった。
- 4 逃亡奴隷が作った集落は、パレンケなどスペイン語圏ラテンアメリカにも存在したが [Moura 2021: 24]、
自らもキロンボ出身でキロンボに関する重要な研究を残した社会学者クローヴィス・モウラは、ブラジ
ルの特殊性について、奴隷の存在が特定の地域に偏っていたほかのラテンアメリカ諸国とは異なり、ブ
ラジルの全土に根を下ろしたことだと述べている [Moura 2021: 17]。
- 5 2019 年のブラジル地理統計資料院 (IBGE) の調査によると、白人の失業率が 9.3% であるのに対し、黒
人系 (黒人または褐色膚の人。以下同) は 13.6% で、有職者でも非正規雇用は黒人系が 47.4% と半数に
迫る数字であるのに対し、白人は 34.5% である。これは収入にも直結し、月給の平均が白人は 2,884 レ
アルであるのに対し、非白色人は 1,663 レアルで、白人のほうが 73.4% 多い。この結果、黒人系の貧困
者の割合は白人よりも明らかに多く、黒人は、世界銀行が定める国際貧困ラインを下回っている人口の
70% を占めている (黒人系の人口に占める割合は 56.3%)。[Agência IBGE] また 2018 年の IBGE の調査で
は、黒人系の人口では約 55.8% を占めているにもかかわらず管理職に就いている人の割合は 29.9% と明
らかな差があり (白人は 68.6%)、またこれが未活用労働指標では、白人が 18.8% であるのに対し黒人系
は 29.0% と逆転している。[IBGE educa jovens]
親の経済力や学歴は子どもの教育にも大きく影響するため、社会的格差は教育的格差にもつながる。
2023 年においても、25 歳以上の黒人のうち中等教育機関の卒業者は、白人の 61.8% に対し、48.3% と低
くなっており、高等教育へのアクセスになると、その不平等はさらに大きくなる。18 歳から 24 歳のうち
の大学在学または卒業者は、白人は 36% であるのに対して、黒人は 19.3% に留まっている。また非識字
率においても人種間の不平等が現在もなお見られ、2023 年における黒人の非識字率は 7.1% で、これ
は白人の 3.2% の 2 倍を超える。これを 60 歳以上で見ると、その差はさらに大きくなり、黒人が 22.7%

- で白人が8.6%となっている。[RBA]
- 6 2022年、513人の連邦下院議員のうち黒人は124人で、全体の24%に過ぎず、とくに上院に限定すると、黒人の上院議員は13名しかおらず、これは81議席のうち16%である。[Tribunal Superior Eleitoral]
 - 7 2019年のIBGEの調査によると、専用のトイレがないこと、耐久性のない外壁材の使用、住人の過密状態、過剰な家賃負担、所有権証明書がないことのうち、いずれかの条件を満たしていない不適切な住宅に住んでいる人がブラジルには4,520万人いるが、その内訳は白人が1,350万人、黒人が3,130万人だという。[Agência IBGE]
 - 8 2018年のブラジルの殺人被害者は、実に黒人が75.7%を占めている（人口では黒人は約56%）。また女性の殺人被害者のうち黒人女性が占める割合は68%である。[Ipea 2020: 47] リオデジャネイロでは職務質問を受けた人の63%が黒人で白人は31%対照的である（人口では白人51%、黒人48%）。[Justabrazil] また警察署での写真認識に基づいて不当に起訴され、その後無罪判決を受けた人の83%が黒人だという統計もある。[Jusbrasil]
 - 9 家事労働者全体の92%が女性で、そのうち65%が黒人女性である。[agência brasil]
 - 10 RIBEIRO (2019), p85.
 - 11 本節の内容は、ASSUMPCÃO (2020a), BENÍCIO (2021) に基づいている。
 - 12 “cavalo” はアフロブラジル宗教でミディウムの意味を持つ。
 - 13 ビリンバウとはアフロブラジルの武芸であるカポエイラの伴奏に使われる楽器である。
 - 14 アンダソンはこれに「キロンビズモ」という用語を充てており、これについては後述する。
 - 15 全詩集の編者アウベルト・プシェウはこのことを指摘したうえで、その5冊がまるで多面的な動きを持つ一冊の本のように仕上がっていると述べている [ASSUMPCÃO 2020: 170]。
 - 16 「本当の詩 (Poema verídico)」では「叫ぶことに何の意味があるのか」と悲観的な言葉が見られ、「太鼓 II (Tambor II)」では「誰も我々の痛みのメッセージを理解してくれない」と弱音を吐いている。また「黄金の橋 (Ponte de ouro)」では「もう私は去る／誰も私の叫びを聞いてくれない」、「私は疲れた (…)

曙光を待っても無駄だ (…)

もう抗議も叫びもしない」と諦念が吐露され、「日食 (Eclipse)」では「鏡を見る／私が見えない／そこにいるのは／私じゃない」と自分を見失っている。
 - 17 義父からもらったのは Enesto Ennes 著の *As guerras nos Palmares* で、その後、勉強会では Edison Carneiro の *O quilombo dos Palmares* を用いたという。[Google Arts & Culture]
 - 18 番号は振られていないが、連と連の間隔を広めに置かれている。この作品にはジョナタス・コンセイサオン・ダ・シウヴェアが黒人運動の変遷と重ねて分析した研究があり、本論ではそれを踏まえて考察を加えた。
 - 19 当時は軍事政権下であったため、まずはウルグアイでスペイン語版の *Palmares la guerrilla negra* として発刊され、1973年にポルトアレグレの Movimento 社からポルトガル語版が隠微な形で出版された。その後リオデジャネイロの Graal 社から第2版、第3版、第4版がそれぞれ1978、81年、83年に出版され、1984年にポルトアレグレの Mercado Aberto 社から増補された第5版が出版された。[FREITAS 1984: 4, MAESTRI 2023] シウヴェイラが受け最初に受け取ったのはスペイン語版である
 - 20 村落の多くはモカンボ (mocambo) と呼ばれていたが、それ以外にセルカ (cerca) やキロンボと呼ばれているものもあった。数については L. Gomes は18と記し [GOMES 2019: 408]、F. Gomes は dezenas comunidades e povoados とし [GOMES 2005: 82]、主なものに20を挙げている [GOMES 2005: 87]
 - 21 ナシメントは「土地はパルマーレスの全住民に帰属し、集団作業の成果も共有だった」と書いている。[NASCIMENTO 2002:71]
 - 22 フレイタスがパルマーレスでの奴隷制の存在を指摘しているという記述もあるが [GOMES 2010:10]、フレイタスは「パルマーレスでは男性が不足していたため男性を拉致することもあり、その男性が何度か近隣の襲撃に参加したうえで信用を得られたときに初めて自由を得られたとあり、「パルマーレスの住民がアフリカ文明の奴隷制の伝統によって奴隷制を確立したとするのは全くの誤りである。いわゆる『アフリカの奴隷制』は、今日では完全に否定されている歴史的誤解にすぎない。アフリカでは、奴隷制は生産の手段として存在したことはなく、例外的に現われる場合でも、ほとんどが家父長的な性質を帯びていた。戦争捕虜は、ある程度の時間が経つと、勝者の家族に取り込まれることがほとんどであった。」と書いている。[FREITAS 1984: 29]
 - 23 フレイタスは「あの黒人たちは、奴隷制度を打倒しようと真剣に考えてはいなかった。全体的な蜂起を起こそうという考えが彼らの頭に浮かんだとは、とても考えられない。」と書いている。[FREITAS 1984: 28] ただ植民地政府や農場主からみれば体制を揺るがす脅威であったこと、パルマーレスの人々が討伐隊に最後まで戦い尽くしたこと、また奴隷たちが自分たちの境遇に大きな不満を持って抵抗したことはたしかであろう
 - 24 「(…)

経済システムとしてのキロンビズモは、アフリカの伝統の共同体主義 (comunalismo tradicional) やウジャマフィズムをブラジルの環境に適応させたものである。このようなシステムでは、生産関係は、資本主義と呼ばれる、すべてを犠牲にして得る利潤に基づく労働強奪経済とは基本的に異なる。キロンビズモのテンポとリズムは、運用メカニズムと結びつき、集団生活のさまざまなレベルを調整し、その弁証法的な相互作用が人間の完全な実現を提案し、保障する。土地、生産手段、自然の他の要素の私有はない。創造的な社会において、労働は罰や抑圧、搾取の手段として定義されることはなく、むしろ市

- 民が権利として享受し、社会的義務としての解放の形と見なされる。技術資本主義的な生産の抑圧と搾取から解放されることで、労働者の苦しみは寄生的なブルジョア社会を支えるものではなくなり、その社会は暇つぶしの遊びや無意味なことに喜びを見出すこともなくなる」(Nascimento 2002: 348)
- 25 これらは歴史家 Jean Marcel Carvalho França と Ricardo Alexandre Ferreira が分類したものだという。[GOMES 2019: 426]。
 - 26 ゴメスは、1982年刊としているが、1982年に刊行された同名の版はなく(FREITAS 1984)、第3版は1981年に刊行されているため、1981年とした。
 - 27 2024年8月現在でもその情報が掲載されている。
 - 28 18世紀半ばのミナスジェライスに現われたキロンボ・ジ・アンブロージオは1746年にいったんは討伐隊によって破壊されたが、しばらく後同じところに規模をさらに上回るキロンボ・ジ・カンポ・グランジが出現し、人口1万人ほどになっていたという。[Moura 2022:57-59]
 - 29 奴隷のマヌエウ・コンゴは、ほかの奴隷たちを従えてフレゲジニア農場で蜂起し、白人の農夫を殺害し、管理人を追放した後、同じ所有者の他の農場にも襲撃を加えた。そして森に逃げ込み、キロンボを結成した。そこでマヌエル・コンゴは王(Rei)を宣言し、その後も周囲の農場への襲撃を続けたため、そのキロンボの存在は周囲にとって大きな脅威となり、当局は民兵による討伐隊を派遣し、キロンボは破壊され、翌年1839年にマヌエウ・コンゴは絞首刑に処された。[Moura 2022:61-62]
 - 30 1838年に北部のマラニャオンで、農場主間の争いが貧困、飢餓、社会的不平等に抗議する民衆運動に発展し起こったバライアーダの乱では、キロンボ・ド・コズミ・ヴェーリオの指揮の下で多くのキロンボの住人(以下「キロンボラー」)が参加したという。鎮圧されたときには約2400人のキロンボラーが逮捕され、最後にコズミは絞首刑に処された。[Moura 2022:60-61]
 - 31 João Cândido Felisberto (1980-1969) は、1910年にブラジル海軍の兵士に対する非人道的な扱い、特に鞭打ちに反対して起きた「鞭打ちの乱」のリーダーで、やはり文化、音楽、文学、歴史研究などで人種差別や社会的抑圧に対する抵抗の象徴になっている。Solano Trindade は、アフロブラジル文化を称揚し、社会的不平等と人種差別を告発する詩で知られる詩人で、黒人運動で重要な役割を果たした。
 - 32 境界の年号に重なりがあるため、それぞれ始まりとされている方の年を優先した。
 - 33 センター創設の趣旨について José Correia Leite は *O Clarim d'Alvorada* で O objetivo do [Centro Cívico] Palmares foi fazer a aproximação do negro pra uma tentativa de levantamento para acabar com aquela dispersão que havia e está havendo até hoje. と書いている [SILVA 2004: 25-26]。

参考文献

【書籍・論文】

- ANDERSON, Robert (1996). “O mito de Zumbi: implicações culturais para o Brasil e para a diáspora africana”, Afro-Ásia, Salvador, n. 17, 1996. DOI: 10.9771/aa.v0i17.20859. <https://periodicos.ufba.br/index.php/afroasia/article/view/20859> 閲覧日 2024/8/2
- ASSUMPCÃO, Carlos de (2020a). *Não parei de gritar: Poemas reunidos*, São Paulo: Editora Schwarcz.
- ASSUNMPÇÃO (2020b). “O grito como herança” (entrevista com Carlos de Assumpção), por Alberto Pucheu, Cult, 3 de março de 2020. <https://revistacult.uol.com.br/home/o-grito-como-heranca/> 閲覧日 2024/8/2
- ASSUNMPÇÃO (2021). ENTREVISTA | Carlos de Assumpção: Um grito de esperança, Por Luiz Felipe Leprevost. Cândido, Biblioteca Pública do paraná, 29/09/2021. <https://www.bpp.pr.gov.br/Candido/Noticia/ENTREVISTA-Carlos-de-Assumpcao> 閲覧日 2024/8/2
- AUGEL, Moema Parente Augel (2021). “Os herdeiros de Zumbi: representação de Palmares e seus heróis na literatura afro-brasileira contemporânea” literafro: o portal da literatura afro-brasileira. <http://www.letras.ufmg.br/literafro/artigos/artigos-teorico-criticos/143-moema-parente-augel-os-herdeiros-de-zumbi> 閲覧日 2024/7/26
- BENÍCIO, Ricardo (2021). “Carlos de Assumpção : Dados biográficos”, Liteafro: Portal da literatura afro-brasileira, atualizado em 05 de novembro de 2021. <http://www.letras.ufmg.br/literafro/autores/180-carlos-de-assumpcao> 閲覧日 2024/8/19

- FREITAS, Décio (1984). *Palmares - A guerra dos escravos*. 5a ed. Porto Alegre: Mercado Aberto.
- GOMES, Flávio (2005). *Palmares: Escravidão e liberdade no Atlântico Sul*. São Paulo: Editora contexto.
- GOMES, Flávio (2010) (org.) *Mocambos de Palmares: histórias e fontes* (Séc. XVI-XIX). Rio de Janeiro: 7Letras.
- GOMES, Laurentino (2019). *Escravidão: Do primeiro leilão de cativos em Portugal até a morte de Zumbi dos Palmares*, volume 1. Rio de Janeiro: Globo Livros.
- Instituto de Pesquisa Econômica Aplicada – Ipea (2020) , *Atlas da Violência 2020*. Atlas da Violência. <https://www.ipea.gov.br/atlasviolencia/download/24/atlas-da-violencia-2020> 閲覧日 2024/8/19
- MAESTRI, Mário (2023). “Dandara e Zumbi dos Palmares” , a terra é redonda, 28;05;2023. <https://en.terraeredonda.com.br/dandara-dos-palmares/> 閲覧日 2024/12/07
- MOURA, Clovis (2021). *Quilombos: resistência ao escravismo* (5a ed.). Teresina: EdUESPI.
- MOURA, Clovis (2022). *Os quilombos e a rebelião negra*. São Paulo: Editora Dandara.
- MUNANGA, Kabengele (1996). “Origem e histórico do quilombo na africa” ,Revista Usp, v. dez./fe 1995/96, n. 28, p. 56-63, 1996. <https://revistas.usp.br/revusp/article/view/28364> 閲覧日 2024/12/7
- NASCIMENTO, Abdias do. (2002). *O quilombismo*. 2a ed. Brasília/Rio de Janeiro: Fundação Palmares OR Editor Produtor.
- PAULA, Rodrigo Pires (2021). “A figura do herói Zumbi: de objeto da história a sujeito da literatura” . literafro: o portal da literatura afro-brasileira. <http://www.lettras.ufmg.br/literafro/atores/28-critica-de-autores-masculinos/290-a-figura-do-heroi-zumbi-de-objeto-da-historia-a-sujeito-da-literatura-critica> 閲覧日 2024/7/26
- RAMOS, Silvia et al. (2022). *Negro trauma : Racismo e abordagem policial no Rio de janeiro*, Centro de Estudos de Segurança e Cidadania - CESC. chrome-extension://efaidnbmninnbpcjpcglclefindmkaj/https://cesecseguranca.com.br/wp-content/uploads/2022/02/CESEC_elemento-suspeito_final-3.pdf 閲覧日 2024/9/7
- RIBEIRO, Djamilia (2019). *Pequena manual antirracista* 1ª edição. São Paulo: Companhia das Letras.
- SANTOS, Vanusia Amorim Pereira dos (2021). “Poesia e resistência: uma breve análise de 'Não pararei de gritar', de Carlos de Assumpção” , *Linguística, letras e artes e as novas perspectivas dos saberes científicos 4* / Organizador Adaylson Wagner Sousa de Vasconcelos. – Ponta Grossa - PR: Atena, 2021. DOI 10.22533/at.ed.7862108034 閲覧日 2024/7/25
- SHMITT, Alessandra/TURATTI, Maria Cecília/CARVALHO, Maria Celina Pereira de. “A Atualização do conceito de quilombo: identidade e território nas definições teóricas” . Revista Ambiente and Sociedade. 10. 10.1590/S1414-753X2002000100008 閲覧日 2024/7/25
- SILVA, Denise almeida (2015). “Literatura negra brasileira: quilombismo, teoria e praxis, abralic - XIV Congresso Internacional Fluxos e correntes: trânsitos e traduções literárias” , ANAIS ELETRONICO ISSN 2317-157X. Belém - Pará. chrome-extension://efaidnbmninnbpcjpcglclefindmkaj/https://abralic.org.br/anais/arquivos/2015_1455933047.pdf 閲覧日 2024/7/25
- SILVA, Jônatas Conceição da. (2004). “Vozes quilombolas: uma poética brasileira. Dissertação” (mestrado) - Universidade Federal da Bahia, Instituto de Letras. <https://repositorio.ufba.br/handle/ri/29936> 閲覧日 2024/7/13
- SILVEIRA, Oliveira (1987). *Poema sobre Palmares*. Porto Alegre: edição do autor.
- SOUZA, Gustavo Orsolon de (2010). “Clóvis Moura e o livro Rebeliões da Senzala: Um breve panorama sobre o debate da resistência escrava” . v. 2 n. 2 (2010): Edição 04 - Temporalidades, Belo Horizonte, Vol. 2, n. 2 (ago./

dez. 2010) <https://periodicos.ufmg.br/index.php/temporalidades/article/view/5403> 閲覧日 2024/9/8

VAZ, Zélia Maria N. Neves(2021). “Carlos de Assumpção: resistência e afirmação do negro”, literafro: o portal da literatura afro-brasileira. <http://www.letras.ufmg.br/literafro/autores/28-critica-de-autores-masculinos/179-carlos-de-assumpcao-resistencia-e-afirmacao-do-negro-critica> 閲覧日 2024/7/25

XAVIER FILHO, José Luís (2020). “Do Kilombo ao quilombo: Uma breve análise historiográfica quilombola da África ao Brasil e a valorização das memórias, oralidades e história oral nas comunidades remanescentes atuais”, XIX Encontro de História da Anpuh-Rio. chrome-extension://efaidnbmnnnibpcajpcglclefindmkaj/https://www.encontro2020.rj.anpuh.org/resources/anais/18/anpuh-rj-erh2020/1599584773_ARQUIVO_84969bb29452cf747b160084b0d42490.pdf 閲覧日 2024/7/25

ホール, スチュアート、宇波彰訳 (2001). 「誰がアイデンティティを必要とするのか」 in 『カルチュラル・アイデンティティの諸問題：誰がアイデンティティを必要とするのか?』、大村書店.

矢澤達宏 (2019). 『ブラジル黒人運動とアフリカ：ブラック・ディアスポラが父祖の地に向けてきたまなざし』、慶應義塾大学出版会.

【WEB 記事】

“Racismo institucional leva polícia do Brasil e dos EUA a matar mais negros e pobres”, “Sociedade”, CartaCapital, 13 de agosto, 2019. <https://www.cartacapital.com.br/sociedade/racismo-institucional-leva-policia-do-brasil-e-dos-eua-a-matar-mais-negros-e-pobres/> 閲覧日 2024/8/10

“O Renascença Clube: Um dos quilombos urbanos do Rio de Janeiro”. <https://renascencaclube.org.br/> 閲覧日 2024/8/14

“Matérias especiais - Desigualdades sociais por cor ou raça no Brasil”, IBGE educa jovens. <https://educa.ibge.gov.br/jovens/materias-especiais/21039-desigualdades-sociais-por-cor-ou-raca-no-brasil.html> 閲覧日 2024/8/19

“Síntese de Indicadores Sociais - Trabalho, renda e moradia: desigualdades entre brancos e pretos ou pardos persistem no país”, Agência IBGE Notícias, 12/11/2020 10h00 | Atualizado em 12/11/2020 17h47. <https://agenciadenoticias.ibge.gov.br/agencia-noticias/2012-agencia-de-noticias/noticias/29433-trabalho-renda-e-moradia-desigualdades-entre-brancos-e-pretos-ou-pardos-persistem-no-pais> 閲覧日 2024/8/19

“Negros no Brasil têm menos tempo de estudo: desigualdade persiste na educação”, Educação-Racismo, Rede Brasil Atual-RBA. <https://www.redebrasilatual.com.br/educacao/negros-no-brasil-tem-menos-tempo-de-estudo-desigualdade-persiste-na-educacao/> 閲覧日 2024/8/24

“TSE promove audiência pública sobre ‘Desigualdade Racial e Sistema Eleitoral’”, Tribunal Superior Eleitoral, 18/05/2022 14:10 - Atualizado em 11/08/2022 16:06. <https://www.tse.jus.br/comunicacao/noticias/2022/Maio/presidente-do-tse-enfatiza-baixa-representatividade-negra-no-congresso-em-audiencia-publica-sobre-desigualdade-racial-e-sistema-eleitoral> 閲覧日 2024/8/20

“Oliveira Silveira - Vida e obras” (site da Universidade Federal do Rio Grande do Sul - UFRGS) <https://www.ufrgs.br/oliveirasilveira/obra/> 閲覧日 2024/8/21

Fundação Cultural Palmares. <https://www.gov.br/palmares/pt-br/> 閲覧日 2024/8/23

“O negro como alvo: a questão do racismo estrutural nas investigações criminais”, Jusbrasil. <https://www.jusbrasil.com.br/noticias/o-negro-como-alvo-a-questao-do-racismo-estrutural-nas-investigacoes->

criminais/1689626749 閲覧日 2024/9/7

“Mulheres negras são 65% das trabalhadoras domésticas no país”, Agência Brasil <https://agenciabrasil.ebc.com.br/geral/noticia/2022-04/mulheres-negras-sao-65-das-trabalhadoras-domesticas-no-pais> 閲覧日 2024/9/7

“Carlos de Assumpção agora é doutor honoris causa pela UFRJ: Poeta é um dos decanos na literatura afro-brasileira”, Conexão UFRJ, Por Victor França, 18 de fevereiro de 2022. <https://conexao.ufrj.br/2022/02/carlos-de-assumpcao-agora-e-doutor-honoris-causa-pela-ufrj/> 閲覧日 2024/09/10.

“UFRGS concede Título de Doutor Honoris Causa a Oliveira Silveira”, UFRGS 90 anos, 26/11/2021. <http://www.ufrgs.br/ufrgs/noticias/ufrgs-concede-titulo-de-doutor-honoris-causa-a-oliveira-silveira> 閲覧日 2024/09/10.

“1960-1970: Grupo Palmares de Porto Alegre e a afirmação do Dia da Consciência Negra”, Google Arts & Culture. <https://artsandculture.google.com/story/BgXRJakjmcizKA?hl=pt-BR> 閲覧日 2024/9/9.

【オンライン辞書】

Dicionário Priberam da Língua Portuguesa [em linha], 2008-2024 <https://dicionario.priberam.org/> 最終閲覧日 2024/12/7

Dicionário Online de Português <https://www.dicio.com.br/> 最終閲覧日 2024/12/7

Quilombo and Afro-Brazilian Literature

Chika Takeda

Summary

Quilombos, particularly Palmares and its leader, Zumbi, play a very important role in Afro-Brazilian culture as a symbol of resistance and struggle. This paper examines the significance of the Quilombo, Palmares, and Zumbi for Black people and their roles in literature by analyzing Carlos de Assumpção’s poetry and Oliveira Silveira’s *Poema sobre Palmares*.

Assumpção’s poems not only represent the anger and sorrow of black people suffering from discrimination and poverty, but also strongly protest against a society with structural racism. Simultaneously, they call on Afro-Brazilians to take pride in their culture, memory, and themselves. They also urge them to fight injustice together in quilombos; and hold hope for the return of Zumbi. In this context, Zumbi is deified as a messiah-like figure who fulfills the aspirations of the black people. Interestingly, Zumbi’s presence in Assumpção’s poetry increased after the publication of his second poetry collection, *Quilombo*, in the year 2000.

Silveira’s representative work, *Poema sobre Palmares*, is an epic-like poem that portrays the Quilombo of Palmares, which resisted repeated military expeditions by the government and fought until its eventual defeat. However, it is not merely a celebration of its achievements. The poem extols the active involvement of black people in the history of Brazil’s nation-building, describes a quilombo as a free society based on African traditions and communalism, and highlights how black people continued their resistance following Palmares’ example. It asserts that the struggle against injustice continues in the modern-day quilombo, and in that sense, the poem itself is seen as a quilombo.

Originating as settlements for runaway slaves, quilombos continue to this day as places that preserve the memory of ancestral suffering and struggle, carrying forward a spirit of resistance, while consciously maintaining cultural traditions rooted in Africa. They serve as sites fighting contemporary injustices and struggling for freedom and equality. Quilombos function as cultural and social hubs that foster a sense of community and solidarity as part of their identity. Zumbi and Palmares, carrying the memory of resistance against Portuguese colonial slavery, became discourses created during the rise of the Black Movement in the 1970s and the 1980s, aimed at the struggle for modern-day freedom and equality. Literature has contributed to this discourse by incorporating it as a theme in many studies. In Assumpção’s poetry, particularly because of the need to appeal to the masses, Zumbi was likely mythologized through a rhetorical strategy, leading to his increased presence in works after the second poetry collection.

キーワード

ブラジル文学 アフロブラジル文学 キロンボ パルマーレス ズンビ

Key words

Brazilian Literature Afro-Brazilian Literature Palmares Zumbi Quilombo

This work was supported by JSPS KAKENHI Grant Number JP21K00432.

本研究は JSPS 科研費 JP21K00432 の助成を受けたものです。